

ししゅうによいりんかんのんぞう
刺繍如意輪観音像

<概要>

員 数	1 幅 ^{ぶく}
法 量	縦 92.3cm 横 40.1cm
時 代	南北朝時代（14 世紀）

本作品は掛幅装^{かけふくそう}で、目の詰まった平絹地^{ひらぎぬじ}を繡地^{ぬいじ}として、様々な色糸を用いた刺繍により、海中の補陀落山^{ふだらくさん}³にあって岩に坐す如意輪観音像を表している。中央に大きく設けた本紙部と天、地の合わせて3段の区画から構成される。各区の図様はまず平絹地に墨線で描かれ、その上に刺繍を施している。色糸の界線は、細い黒糸の返し繡^{はししゅう}によっているが、現状でほとんど脱落している。本紙部の周りの中廻し部分には、髪繡^{あぐい}⁴で天台宗安居院流^{あぐい}⁵唱導^{ちやうどう}⁶の始祖澄憲^{ちやうけん}⁷（1126 - 1203）の撰述になる『如意輪講式』から採った伽陀^{かだ}⁸などを表す。また天と地には、蓮華唐草^{れんげからくさ}を刺繍する。

本作を伝える観音寺は、浄海山^{じやうかいざん}と号し、聖観音菩薩像（秘仏）を本尊に祀り、荒子観音と通称される。

本作のごとき図様・地ともに多くの色糸を用い刺し繡を主体として総繡する作例は、繡仏が最も盛行した鎌倉時代から南北朝時代にかけて見られるもので、本作の場合、繡技にいささかの粗さが認められることから、南北朝時代（14 世紀）の制作と考えられよう。岩座に坐す如意輪観音像を表す繡仏は全国的にも作例がごく希少で、しかも宝珠を捧げた龍で『法華経』の要素を加味し、さらに『如意輪講式』の伽陀を髪繡して極楽往生の願意を明確にするなど、補陀落観音信仰に円教^{えんけう}⁹や浄土教^{じやうとけう}¹⁰の教理を重ねた天台宗^{てんたいしゆん}の作善^{さぜん}¹¹であることが明快な点で、全国的にも唯一無二の貴重な作例といえることができる。

1 掛け軸のつくり。

2 絹織物の一種。ほぼ同じ太さの生糸を、経に1~2本、緯に2~3本を引きそろえて平織にしたもの。

3 南インドにあると伝説的に信じられている観世音菩薩の霊場。

4 人間の頭髪を材料とする刺繍

5 もと比叡山竹林院の僧坊。その開基澄憲を始祖とする説経師が根拠地としたので、この系統の説経を安居院流という。

6 仏法を説いて衆生を導く語りもの。

7 （大治元年（1126年） - 建仁3年（1203年））平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての天台宗の僧。父は藤原通憲（信西）。蓮行房・安居院法印とも号する。

8 偈文。經典中で、詩句の形式をとり、教理や仏・菩薩をほめたたえた言葉。

9 円満完全な教え。

10 阿弥陀仏の極楽浄土に往生し成仏することを説く教え

11 仏縁を結ぶための善事を行うこと。造仏・造塔・写経など。



刺繡如意輪觀音像 (愛知県 提供)